

水稲疎植栽培における育苗箱処理剤の害虫防除効果

○加進丈二¹・相花絵里^{1,2}・鈴木智貴^{1,2}・大江高穂¹・大槻恵太^{1,3}

¹宮城県古川農業試験場

²現 宮城県仙台地方振興事務所

³現 宮城県農林水産部農林水産政策室

水稲の疎植栽培は、通常よりも株間を広げて苗を移植することで必要な育苗箱数を削減し、資材費や作業労力の低減を可能とする栽培法である。しかし、育苗箱数の削減は育苗箱処理剤の単位面積当たり投入量の削減を伴うため、病害虫に対する防除効果の不安定化が懸念される。そこで、本研究では、稚苗または乳苗を疎植栽培した場合の主要害虫に対する育苗箱処理剤の防除効果について検討した。

クロラントラニリプロール・プロベナゾール粒剤を床土混和処理して育成した稚苗を疎植栽培（栽植密度：11.1株/m²）した場合の防除効果を慣行栽培（22.2株/m²）と比較して検討した結果、イネミズゾウムシ、イネドロオイムシ、フタオビコヤガに対する防除効果は慣行と同等であった。

クロラントラニリプロール・プロベナゾール粒剤を移植当日処理した乳苗を疎植栽培した場合の防除効果を稚苗の慣行栽培と比較して検討した結果、イネミズゾウムシ、イネドロオイムシに対する防除効果は慣行と同等であった。また、育苗箱処理剤を使用しない場合、乳苗疎植栽培におけるフタオビコヤガとイネツトムシの密度は稚苗慣行栽培よりも高まる傾向が認められたが、育苗箱処理剤の防除効果は慣行と同等であった。

チアメトキサム・ピロキロン粒剤を移植当日処理した稚苗を疎植栽培した場合の斑点米カメムシ類に対する防除効果を慣行栽培と比較して検討した結果、カメムシ類（アカスジカスミカメ主体）の密度および斑点米率は栽植密度に関わらず育苗箱処理剤を使用しない場合との間に明瞭な差は認められず、効果は不良と判断された。

これらの結果から、疎植栽培で育苗箱処理剤を使用した場合、イネミズゾウムシ、イネドロオイムシ、フタオビコヤガおよびイネツトムシに対しては慣行栽培と同等の防除効果が得られるものの、斑点米カメムシ類に対しては慣行栽培と同様に防除効果を期待できないと考えられた。

なお、本研究は復興庁・農林水産省の「食料生産地域再生のための先端技術展開事業」により実施したものである。

Effects of Insecticidal Nursery Box Application with Sparse Planting on Insect Pests of Rice.

Joji Kashin¹・Eri Aihana^{1,2}・Tomotaka Suzuki^{1,2}・Takaho Oe¹・Keita Otsuki^{1,3}

¹Miyagi Prefectural Furukawa Agricultural Experiment Station

²Miyagi Prefectural Sendai Regional Development Office

³Miyagi Prefectural Agriculture, Forestry and Fisheries Policy Promotion Division